

大念佛

No.83

発行/融通念佛宗
総本山 大念佛寺

大阪市平野区平野上町1-7-26
TEL.06-6791-0026

題字：融通念佛宗 第66世管長 倍巖良舜 大僧正ご親筆

新春を仰ぎ檀信徒の皆様には心身ともに清らかに希望に満ちた新年をお迎えのこととお喜び申しあげます。本年は四月三十日をもって天皇陛下が退位なされ、新元号が制定される記念すべき年であります。万事が瑞瑞しく華やき、猪突の如く勢いのある年となるよう祈るところであります。

旧年はたび重なる自然災害のため多くの人の貴い生命が奪われ、又被災なされその生活基盤までも失われた多数の人が不自由で厳しい生活環境の中で年を越しておられます。一日も早い復興と生活の再生を共に祈り申し上げます。

私たちの本山も二十一号台風で本堂屋根をはじめ諸堂の屋根瓦が飛散し、大きな被害を被りました。幸い参詣者等には人的

被害がなかったことで安堵しております。

江戸時代、越後の良寛和尚は「災難に逢う時節には災難に逢うがよく候、死ぬ時節には死ぬがよき候」との言葉を残しておられます。これは、文政年間新潟県三条を中心に大地震が起き、千五百もの人が亡くなった時、良寛和尚が親戚の人に送った見舞状の中の一節です。さめた言葉のように受け取られますが、そうではなく、あるがままの現実を見据えることが災害を逃れる優れた方法ではないか。災害はいつでも起きるかもしれない、他人事ではなくいつ自分に降りかかってくるかも知れない。死というのと同じ、無常の風についてさらされるかも知れないとの覚悟を常に持って毎日を過ごさなければいけない。災害も死も



迎春

融通念佛宗務総長 田中 瑞修

決して他人事ではなく自身のものとして示して下さった言葉です。

清水寺管長で百七歳の天寿を全うされた大西良慶師は五重の塔の話をよくされました。その中で「五重塔は地震が起きて、台風が来ても倒れないのはなぜですか？」と参詣者に問われました。「塔にも地震にも弱いはず、ところが倒れない。これは建築する時に塔は最初から倒れるもの、壊れるものとして建築してあるから倒壊しない、人は壊れないもの、倒れないものとして造るから倒壊するのだ」と申されて参詣者を笑わされた。



あたりまえの物は一つありません。今日一日の無事、一日の健康、全てが神仏の力、ご縁に守られているとの感謝の心を持ち、一日一日を大切に過ごしていただき、おかげ様と合掌感謝の日暮れが瑞瑞しく輝く一年を約束してくれるのです。

大念佛寺 年中行事のご案内 (二月、七月)

- 一月一日(火祝) 午前五時 修正会
- 一月十六日(水) 午前十二時 融通念仏会
- 一月十六日(水) 午後二時 百万遍会(大数珠くり)
- 二月三日(日) 午前九時三十分 寒行
- 二月二十六日(火) 午後二時 大般若転読
- 二月二十六日(火) 午後二時 元祖聖応大師 御忌法要
- 三月三日(日) 午前七時 河内御回在御出光
- 三月五日(火) 午後一時 再興大通上人 御忌法要
- 三月三十日(日) 午後二時三十分 写経奉納供養・筆供養
- 五月一日(水) 五日(日・祝) 万部法要
- 五月十六日(木) 午前十一時 融通念仏会
- 五月十六日(木) 午後一時 百万遍会(大数珠くり)
- 五月二十二日(水) 東照大権現忌
- 五月二十九日(水) 午後三時頃 河内御回在御帰院
- 六月十五日(土)、十六日(日) 午後二時 保管霊骨追善法要
- 七月七日(日) 午後一時 中祖法明上人 御忌法要
- 七月二十日(土) 鳥羽上皇忌
- 毎月第二水曜日 午後二時～四時三十分 大念佛寺仏教講座
- 毎月二十六日 午後一時三十分 定例布教(日曜日の時は二十七)
- ★写経のご案内 毎月二十六日、午前九時三十分より午後三時まで、白雲閣にて写経(一巻千円)を行っております。
- ★納骨のご案内 午前九時三十分より午後四時までは年中無休で宗派は問わず納骨を受け付けています。尚、納骨の際は、事前にお問い合わせ下さい。
- 日程については、変更になる時もございます。
- お問い合わせ ☎06-6791-0026

謹賀新年

融通念佛宗総本山 大念佛寺

宗務総長 田中 瑞修
 教学部長 吉井 良久
 庶務部長 佐々木 智祥
 財務部長 篠塚 章臣

話せば心も軽くなる

大阪仏教テレホン相談室

仏事相談、信仰相談、その他あらゆる人生相談を十宗派の僧侶がお受けします。

月曜日～金曜日 一月十日～十二月二十四日(八月休)

でんわ ☎06(六二四五)五一一〇 午後二時～五時迄

護摩供養

音羽山 観音寺内 佐々木 慈暉

「護摩」という言葉は、サンスクリット語の「ホーマ」の音写で「物を焼く」という意味です。神仏の前に祭壇を築き、中央に炬を設けて火を点じて「物を焼く」のですが、そのときに大きく立ち昇る炎は「天の口」であり、仏の智慧の象徴でもあると観想します。炬の口に五穀や香木、願い事の書かれた木札（護摩木）などの供物を投じると、炬中の火焰は天に上って諸神の口に達し、諸神はそれに応じて人々の願いをきき福德を与えると考えられています。

護摩の歴史は古く、古代インド

で行われていたバラモン教の火祭りが起源といわれます。やがて大乘仏教に取り入れられ、密教の修法として日本に伝わりました。修法は息災、増益、敬愛、調伏、鉤召、延命、と目的別に六種ありますが、息災護摩がすべてに通じる上位の法とされています。人は息災であればこそ健康を維持し、働いて財を潤し、良縁や子宝にも恵まれ、開運して諸願を成就できる、ということでしょう。

また護摩行は、実際に護摩壇で護摩木を燃やすだけにとどまりません。自分自身の中にある煩惱を

にある高い精神性の解脱をも成就しえるように組み立てられた行法なのです。

融通念佛宗では、火災によって失われた本堂の再建立を祈願して息災護摩の修法を重ね、昭和十三年に祈願成就して現本堂が建立となりました。

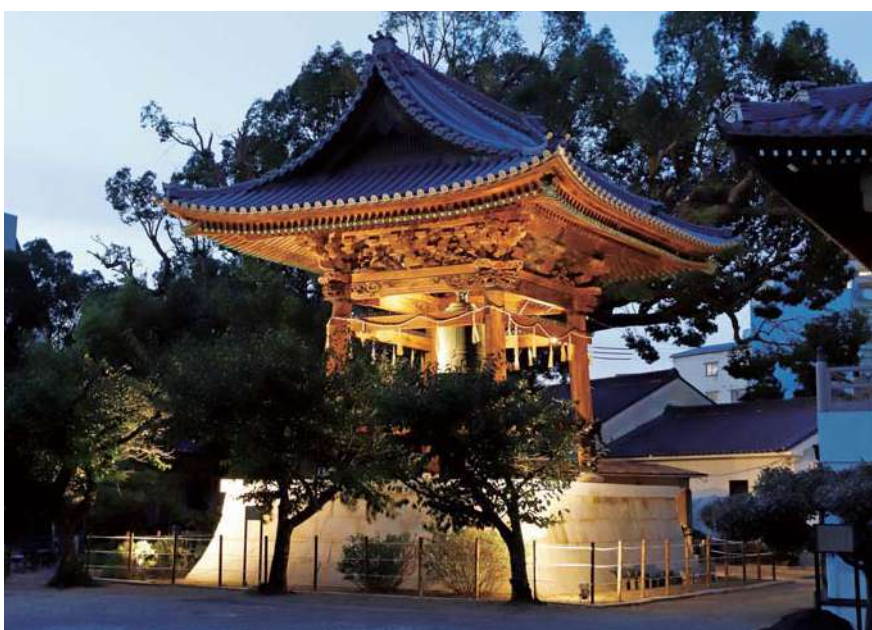
以降、毘沙門天の功德による除災招福、煩惱焼除を願

って、毎月、毘沙門堂で息災護摩を奉修しています。



護摩行

仏の智慧を使つて燃やすことも、護摩行に入ります。すなわち、壇を構え炬に供物を投じて祈願する形式を外護摩、自身を身を壇に見立てて心の迷いや煩惱を焼除する形式を内護摩といえます。このように護摩修法とは、除災招福という世間的願望はもちろん、その奥



鐘楼

●総本山大念佛寺鐘楼修復工事の完遂を迎えられましたこと、謹んでお慶び申し上げます。この度の工事は屋根瓦が崩落し緊急を要するという事で、平成三十年一月九日に現況調査・工事見積りの依頼を頂戴し、三月に安全対策仮囲い設置、四月に工事着手と速やかに進めさせていただきました。十月の工事完了迄の工程で様々な発見や驚きがあった事をこの紙面をお借りして振り返りたいと思います。

●現況調査を行ったところ、大規模な修復ではなく部分的な修繕を重ねている状態でした。木部の傷みは比較的少なく、使用されている材木の質が総じて高いことに起因していると思われませんが、妻面の懸魚や、木連絡格子などは雨風の影響を受けやすく、傷みも顕著なため取替えという判断となりました。小屋裏を調査するため天井点検口を探しましたが、格天井を押し上げて微動だにせず、後述する鳥害を考えると天井板を破るという判断に達しなかったことは幸いでした。

鼓と読経の勢いに、高く火焰が上がり、護摩木に添えた祈願の成就とともに、仏の智慧の炎で自分自身の心の迷いや悩み、無明煩惱を焼き尽くす清浄な行法です。どんなでもご参加できますので、ぜひ足をお運びくださり、内外の護摩行をご一緒に奉じられますようお勧めします。



節分行事

毘沙門天護摩供養

毎年二月三日 午前十時から

毘沙門堂にて

大般若転読

毎年二月三日 午後二時から

本堂にて

総本山大念佛寺鐘楼修復工事の完遂

株式会社金剛組 大阪本店 松本 晋

としました。

万部法要を終えられた後、一日平均四名の作業員が除去作業に奮闘し、五月八日から六月二日迄の間で除去した堆積物総重量は十八トンを超える量です。

姿があらわになった小屋組材は非常に大柄で、屋根、鳩糞等の重量を受けながら形状を維持していたことに納得できるものがありました。

解体作業中に発見された棟札は堆積物が付着し読み取り困難な状態でしたが、大念佛寺様より元興寺文化財研究所に調査を依頼された結果「寛政十二年（一八〇〇）」の建立と確認されました。

解体に続き、小屋組、妻廻りの改修を行い、瓦工事に取掛かる段階で大阪北部地震が発生し、作業工程及び建物への影響が懸念されましたが、無事瓦工事を完了できました。

九月四日には、台風二十一号が各地に大きな被害をもたらし、大念佛寺様におかれても境内に大きな爪痕を残してまいりましたが、本工事への影響は幸い少なく、足場を解体できたことに安堵し、また足場解体後の優美な鐘楼に感動致しました。

●工事期間中に度重なる自然災害を受けながらも、無事竣工を迎えることができたことは、ひとえに融通念佛宗及び総本山大念佛寺関係者様方の御協力の賜物であり、厚く感謝申し上げます。

「人の生死に向き合う」

龍谷大学 教授
森田 敬史さんとの対話

森田敬史さんは大阪府八尾市にある本宗西方寺の僧侶ですが、十年ほど新潟県にある長岡西病院でビハラ僧として終末期の患者さんの心のケアをしてこられました。昨年四月からは後進を育てるため、龍谷大学で教鞭を執られています。今回はお忙しい中、「人の生死に向き合う」というテーマでお話しを伺いました。



森田 敬史さん

Q一 「ビハラ」という言葉は聞き慣れないですが、もともとどういう意味があるのでしょうか。

森田 緩和ケアやターミナルケアはご存じでしょうか。癌などで治療の効果が望めなくなると、残り少ない命となった終末期の患者さんを心身両面でケアすることです。そのような目的で病院に付随する施設が、最初にキリスト教を背景としてつくられました。それを「ホスピス」と名付けられました。「旅人の世話をする、温かくもてなす」という意味があります。

仏教界でも、仏教の思想を基盤にした「仏教ホスピス」の構想があり、一九八五年田宮仁氏（前、淑徳大学大学院総合福祉研究科教授）がその呼称を「ビハラ」と名付けられました。

した。経典などに使用されている、古代インドのサンスクリット語で「寺院や僧院」「安息の場所」という意味があります。そのビハラ病棟は一九九二年新潟県長岡市の長岡西病院に日本で最初に設立されました。

Q二 どうしてビハラ病棟で勤務されるようになったのですか。

森田 私はもともと話し好きで、自坊の月参りにお檀家さんからいろんな話を聞くことが多く、お坊さんというのは何かの可能性を持っているのではないかと思うようになりました。

私は大学では心理学を学んでいて、臨床心理学も少し学んでいたのですが、何を専門にと迷っていた時に、淀川キリスト教病院でホスピス長をされていた柏木哲夫先生が大阪大学の大学院に赴任され、臨床死生学の分野を開講されるということを知りました。その時、もしかしたら臨床死生学には宗教と心理学を結びつけるものがあるのではないかと思いついた。そのゼミにはいったのです。

先生からは「あなたがお坊さんなら、ぜひ心のケアとかスピリチュアルケアを研究しなさい」と勧められ、その研究者としての道を歩むようになったのですが、お坊さんという立場だけでは限られた経験しか無く、研究を深めていくには何かおぼつかない感があったので、外の研究会などに積極的に参加するようになりました。当時関西の研究会では熱心な方が多く、その中で新潟の長岡西病院でビハラ僧として務められていた谷山洋三氏を知ることになりました。

私の実情を分かって下さり、またまたのタイミングで、実はビハラ僧を探しているということで長岡西病院を勧められました。私にとっては聖地で、これは願ってもないチャンスだと思い、熟慮の結果新潟行きを決めました。

そして、大学院も中退して二〇〇七年の三月一日から務めることになりました。

Q三 長岡西病院に勤務されてどうでしたか。

森田 当初はたいへんでした。自身の問題なのですが、それは看護師さんなどスタッフの皆さんから自分が必要とされているのか、相手にされていないのではないかとという思い込みがあり、自分の居場所がないように感じました。毎日が葛藤であり、また学びであったと思います。

Q四 病棟ではどのような実践をされているのでしょうか。

森田 長岡西病院のビハラ病棟は、入った瞬間からお香の匂いに包まれています。

ナースステーションの前には釈迦菩薩像を本尊にした仏堂が設けられており、そこで朝の八時半から約十五分間朝の勤行が始まります。前半の七分はオリジナルな読経で、後半七、八分はお話しです。その後、夜から朝のスタッフの申し送りがあり、情報共有するためそれにも参加します。それが終わると、患者さんの部屋に行ったり、共用スペースでお話しを聴いたり、お見舞いに来られた家族の方のお話しを伺ったりします。決まったパターンはつくっていません。パターン化すると時間を気にして患者さんとの関わりが上滑りになってしまふからです。また、スタッフの方からの要請で動くこともあります。そしてお昼があって、その後医療スタッフのミーティングがあります。午後三時にはカフェの時間があり

患者さんも部屋から出てこられます。四時から夕方の勤行が同じく約十五分あります。その後五時まで、スタッフの方と情報共有したり、患者さんの部屋を訪れたりします。さらに、スタッフの方との情報共有の流れで、スタッフ自身のケアに繋がることもあります。また、専従のビハラ僧は一人であったので、近隣の有志僧侶のボランティア組織である「仏教者ビハラの会」が勤行や種々の仏教行事などに協力して下さっています。

その他、亡くなられた家族のために遺族会があります。なかには、祥月命日や月命日に仏堂にお参りに来られる遺族の方もいらつしやいます。他の病院ではないことです。



勤行風景

Q五 死が目前に迫っている人の精神状態はどのようなものなのでしょうか。

そしてその方と向き合った時、なかなか言葉がみつかりません。どのように話しかければいいのでしょうか。また、どのように接すればいいのでしょうか。

森田 達観された患者さんもおられますが、多くの方は苦悩されています。主に病室に行ってお話しするのはそういう方です。「生きるのが苦しい」とか「早く迎えが来て欲しい」、「死なせて欲しい」などとおっしゃいます。実は「生きたい」という気持ちの裏返しなのでしょう。苦しんでおられる患者さんを前にして、言葉がけをしようと思っても

なかなか一言がでてきません。それは何か言葉をみつけないければならないと思うからです。無理に言葉を取り繕わないで、「私も『死』についてはよく知りません」と素直に伝え、「どう言葉がけをしたらいいのかもわかりませんが、いつしよに悩みましょう。なぜそう感じられるのでしょうかね」というように心を聞いて話しかけることでしょうか。

以前私は「患者さんに寄り添う」という表現を使いましたが、そこには患者さんより「私」が主体となっているようで、「心を寄せる」というほうが適切な感じがしました。それは患者さんと同じように私も苦悩するということです。患者さんの苦悩がたいへんなことだと思いつつ、その人の言葉として受け止めることにしています。

また、田宮氏は「仏教者は『クズカゴ』に成りなさい」とおっしゃいます。患者さんやご家族の不安や恐怖、悩みなどを全て受け入れるクズカゴのごとく、心の整理をしやすいくなるようにお手伝いするのが、目立たない存在ですが、ゴミができたら必要で、近くにあればなおよろしい。そして満杯ではこぼれますのでいつでも空に近い状態にしておくことです。話しの数だけ傾聴者も同じように苦悩するということになりませんが、その苦悩を引きずらずに耐え忍び、気持ち切り替えてリセットすることも必要なのです。

Q六 いろんな話しを聴いて帰宅しても暗い気持ちは続きますね。

その苦悩に耐え忍ばなければなりません。でも、どのように解決されたのですか。

森田 それはですね。私たちの後ろには仏様がいらつしやるではありませんか。これが宗教者や宗教を信じる者の強みです。人間の私ではどうしようもありません、見守って支えて下さる方がいらつし

やるからこそ耐えることができると思っています。

Q七 その他、締めくくりのお話がありましたか。

森田 今の社会において、医療と仏教を結びつけることは少々考えにくいかもしれません。しかし、医療現場において仏教者として従事させて頂いた経験から認識できたことは、その施設を利用していただいている方々の申し出は、他の方々のご迷惑にならないければ、だいたいはそのまま尊重される傾向が強いということだと思います。

もちろん仏教や僧侶に対して、社会に蔓延している表層的な、それだけで否定的なイメージをもたれている場合が少なくありませんでした。けれども、利用されている方々それぞれとの関係性を築いていくと、そのイメージを覆されることが多々ありました。

したがって、これからの僧侶の一つのあり方として、檀信徒さまから「何かあった」時にすぐその場に向かってくるってほしいと呼ばれるような僧侶がもっと求められるべきだと思います。そのための関係性を築くことが大切になることを、自戒の念を込めてお伝えしたいです。また、その上に立って、檀信徒の皆さまには、日頃からの「お寺さん」との関係をさらに密にされ、何かあればそばに居て頂くように頼られてはいいかでしょうか。

森田敬史さんには貴重な時間を取っていただきありがとうございました。また、場所を提供していただいた西方寺様に心から感謝いたします。取材は二時間半ほどにおよびました。掲載した内容は一部に過ぎません。機会があれば講演会のような形で話を聴かせていただけたらと思います。

夏休み子ども 寺子屋体験修行

磯部 さつき

私は看護師をしているということもあり、今回は親としてではなく、看護師として一緒に参加させていただきました。

子ども達には日常生活で、仏壇の前で手を合わせる事以外に仏教に触れる事がないので、この機会に日本の文化、仏教について学ぶ事ができればと思います。

私の家では、子ども達は、携帯電話を触ったりゲームをする時間が長く常に脳がフル回転し、情報に振り回されているのですが、修行中は禁止だったため、普段より自分と向き合う時間を多く持てたと思います。

そして、和太鼓修行ではひとつの太鼓を数名で叩き、みんなと力を合わせて叩ききった充実感、又集団生活をする中で、我慢する事もいろいろあったと思います。その中で自分が輪を乱すと周りに迷惑をかける集団生活での協調性も学べたのではないかと思っています。



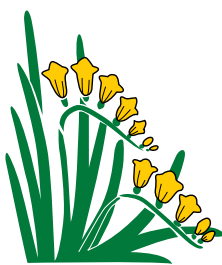
最近では、核家族も多く人の生死にかかわる機会も少なくなっているのかもしれない。しかし「命

のもしび」では、自分たちの命のつながりをローソクの火にたとえ一本のローソクから最後の人まで灯をつないで行き、命は自分だけのものではなく、親から子、子から孫、そして古いご先祖様から受け継がれている大切さが子ども達にもしっかりと伝わったと思います。常日頃から、人との繋がりを大事にされて、遺族の方に関わっておられるお坊さんたちだからこそ言葉の重み、普段では経験できないお寺での体験修行でした。

また登山修行では山頂からの素晴らしい眺めがみられました。お経を唱え、立ったり座ったりする礼拝は子どもと一緒に僧侶の方も同じ回数されていて、子ども達だけでなく大人も同じようにしている姿に感動しました。掃除の時間、写経、感想文など一泊二日で盛沢山のスケジュールでした。

先生であり、また友達のように接しておられる姿もお坊さんのイメージと違い新鮮でよかったです。

子ども達は、この夏休み貴重な経験ができたと思います。この素晴らしい活動がもっと普及していけば、心より思いました。来年も参加したいと言っていました。



山内不幸 大念佛寺 第六十六世法主 倍巖 良舜 管長 猊下 遷化

平成三十年十一月六日に遷化されました。世寿九十七歳。十一月十日ご自坊の奈良法徳寺で葬儀（密葬）が行われました。

各要職を悉く歴任されました。平成十八年二月七日、融通念佛宗管長、第六十六世大念佛寺法主に就任されて以降、現役最長老の世寿にあつて、昨年平成三十年の秋病気のため遷化されました。

(称号)法光院殿圓純良舜大僧正
表葬は新しい管長決定の後に予定しております。

台風による 大念佛寺の被害

昨年の台風二十一号では、総本山大念佛寺でも堂宇、山門等が損壊いたしました。主な被害についてご報告申し上げます。

- 山門右側の樹が倒れる
- 扉の瓦が損壊
- 瑞祥閣 瓦が破損
- 山門の瓦が破損
- 梁松院 降り棟瓦、平部瓦が破損
- 本堂売店 引き戸のガラス破損
- 山門 瓦の破損および落下



などの、大小数十か所が損壊しました。

小 径

平成最後の大晦日を越え、干支最終年である猪の年を迎える。鼠年生まれには、古希を経て、還暦以降のとりわけこの十年あまりの年月が何故かとおしく、そっと思ひ返させられる。

結構今の自分にとって大事な人生の経験ごとが連なっている。定年退職を経て、先妻の年忌法要、癌発症と治療。一方では兼務寺院

での寺院活動開始、地域仏教会の活動、教義の研究会活動にも積極的に参加した。思い巡らすことを容易にするのは、その都度ごとの意識された「儀式めいた営み」のせいであろうか。祝宴開催・法要厳修・研究発表などの「セレモニー」は一種の儀式であるが、節目節目でそのひとときへの意識と行動の集中の結果かもしれない。

を感じることが多い。儀式を整えることによって、その後、安心して忘れておくことが出来る、気がしないので次のことに精を出すことができるのである。現在の一瞬に過去も未来も埋め込まれているからであろうか。年の初めにあたり「儀式儀礼」の重みをもう一度かみしめ、これからも大切にしたいと思う。

自爾